

ムガル朝時代のインド洋と日本

近 藤 治

The Indian Ocean and Japan during the Mughal Period

Osamu KONDO

は じ め に

大洋は、これをとりまく人々を隔てるどころか、相互関係を強める役割を果たす。インド洋は大きさでは3番目であるが、その沿岸に多くの人口を擁した文明国が位置しており、文化的にも経済的にも古来最も活況を呈した大洋であった。日本は地理的に見れば太平洋の西端に位置しているが、歴史的、文化的に見ればインド洋と特別の関係をもっていた。

日本人はヨーロッパの発見以前、世界は日本、中国、インドの三国から成ると長らく考えていた。中国は隣国であり、古くから交流が盛んであったので、日本人にはよく知られていた。しかしながらインドは中国ほどには知られていず、はるか僻遠の地と思われていた。仏教が日本人の中に広まるに従って、インドは仏陀の国と考えられるようになり、西方浄土に位置する理想の国と想定された。多くの人々、とりわけ仏教僧たちはこの理想郷への憧憬を抱いていた。彼らは仏教発生の地インドを訪れて、これをもっと深く学びたいと願った。そのうちの何人かは実際にインド訪問を試みようとしたが、成功したものはまれだった。

中国の文献によれば、サンスクリット語のヴァジュラ・サマーディに相当する金剛三昧なる名の日本人僧が、818年インドの中原の地に到達したということになっているが、彼自身は記録を残していないので、彼が実際にインドの地を踏んだのかどうか、また彼がそこから帰還したのかどうかは定かでない。平城天皇（在位774-824年）の第3皇子高丘親王、すなわち出家後の真如もまた真言密教の奥義を知りたいという並々な願いを持っており、862年唐に渡りそこからさらにインドへとめざしたが、4年後に羅越で死亡した。この羅越はマレー半島に位置していると考えられている。¹⁾

明恵（1173-1232）は仏陀の地を訪問したいとの願望を最も強く抱いた日本人の僧であった、

ということができであろう。彼はインドの仏跡探訪を 30 歳のときと 33 歳のときと 2 度敢行しようとしたが、いずれのときも春日明神の託宣によって出発を断念せざるをえなかった。明恵は長安からマガダに到る旅程表を書き残しているが、それによれば 1 日 8 里のペースで旅行すると 1000 日間でこの両地間を歩むことができるとし、1 日 7 里のペースで 1130 日間、1 日 5 里のペースで 1600 日間の旅程と計算した。彼は紀州の浜辺で拾った小石をいとおしんで、「遺跡を洗へる水も入る海の石と思へばむつまじきかな」と詠んだ。また彼は京都高山寺の裏山を南インドの楞伽山と見たて、ここに遺跡窟を設けて冥想したほどであった。²⁾

一方、少数ながら日本を訪れたインド人の記録も残っている。その中でも南インド出身のバラモン僧菩提僊那（ボーディセーナ）は有名で、中国滞在中に日本からの留学僧たちに請われて来日したのであった。彼は弟子の仏哲らと 735 年に来日し、752 年の奈良の大仏開眼供養の導師をつとめ、8 年後に死去するまでこの都にとどまった。³⁾ また『日本後紀』巻 8 桓武天皇延暦 18 年（799）の条によれば、三河国の浜に昆崙人が漂着し、日本にはじめて棉の種子をもたらしたとされるが、この昆崙人はインドから来た人と考えられた。しかしながら、こうした日本来訪のインド人の事例は極めてまれであって、長い間インドははるかな遠国であり、日本人が足を踏み入れることのほとんど不可能なところという状態が続いた。

1 南海における日本人の活動

16 世紀になると状況は変ってきた。南海における日本人の活動が活発になってきたのである。インドはなお遠い国と考えられてはいたし、日本の船乗りがインドに到達したり、逆にインドの船乗りが日本に到着するということなどはなかなか起こりえないことではあったが、それでもこの時代になると、人々はインドを以前ほど僻遠の地とは思わなくなりはじめたのである。心理的にも、また経済的にも、インドは次第に日本人にとって近い存在となってきたのであった。インド人は古い時代から東南アジア海域に数限りない航海を行なっていたが、日本の船乗りがこの海域に盛んな航海を果たすようになってくると、両者はここで直接接触し取引することが可能となってきた。

日本人の海外での活動が大いに活発となるのに先立って、注目すべき二つの海上活動があった。一つは倭寇の活動であり、もう一つは琉球貿易であった。

倭寇跳梁の第 1 波は 14 世紀から 15 世紀初期にかけて起こった。このときの彼らの活動は、主として朝鮮半島の海岸地方一帯でなされた。倭寇の第 2 波は 16 世紀に起こり、1550 年代にその頂点を迎えた。このときの彼らの活動の主要舞台は、南シナ海および東シナ海であった。倭寇は字義的には「日本人の海賊」を意味するが、明史によれば倭寇において日本人が実際占める割合は十中三に過ぎず、残余はほとんど中国人であった。別の中国の文献、禦倭五事疏に

よると、倭寇の大半は明朝の海禁政策を犯して外国と交易することを望んだ中国人であって、日本人の割合は1割に過ぎなかったという。明朝下の中国政府は14世紀後半の国初以来、政府管轄下のいわゆる朝貢貿易を行ない、海外との私貿易および交流は禁じていた。このために倭寇は、明代において中国の沿岸地方の人々が日本人および他の外国人の助力をえて敢行した一種の強制的な私貿易とみなすことができる。⁴⁾ともあれ、倭寇が日本人の海外活動と南海での交易に刺激を与えたことは、疑いのないところである。

琉球諸島は日本本島の南方、東シナ海に位置しており、当時は独自の政府があった。琉球と東南アジア諸国との交易は、14世紀末以降盛んであった。琉球の人々は日本および中国との貿易も行ない、これと東南アジア貿易とを結合して、中継貿易による利益をえていた。彼らの東南アジア貿易の拠点はマラッカにおかれており、ここには毎年多くの琉球商人が訪れていた。⁵⁾16世紀初頭のポルトガル人旅行者トメ・ピレスによれば、琉球貿易は日本、中国、マラッカを結ぶ典型的な中継貿易であった。彼は次のように述べている。

かれら〔琉球人〕はシナに渡航して、マラカ〔マラッカ〕からシナへ来た商品を持ち帰る。かれらはジャンボン〔日本〕へ赴く。それは海路7、8日の航程のところにある島である。かれらはそこでこの島にある黄金と銅とを商品と交換に買い入れる。…レキオ〔琉球〕人は7、8日でジャンボンに赴き、上記の商品を携えて行く。そして黄金や銅と交換する。レキオ人のところから来るものは、みなレキオ人がジャンボンから携えて来るものである。レキオ人はジャンボンの人々と衣服、漁網やその他の商品で取引する。⁶⁾

琉球人が日本から輸出した品物はいろいろあったが、その中でも金と銅が主要品目であったことは注目される。その交換用として彼らはマラッカから大量のベンガル産布地を買取って、これを中国と日本に再輸出した。このようにして琉球商人は、日本人の海外活動が発展する以前は、日本・中国・東南アジアを結ぶ仲介商人として重要な役割を果たしていた。徳川幕府が鎖国政策を開始した後になってさえも、彼らは非合法的な仲介商人として、九州の南岸を定期的に訪ねていたのである。

このような倭寇と琉球商人の活動は、いうまでもなく16、17世紀の日本人の南海における海上活動と対外貿易を刺激した。このころから日本の対外貿易は世界的な広がりを見せるようになりはじめた。日本が貿易関係を持つようになった国は、もはや東アジアに限定されることはなく、東南アジア、南アジア、西アジア、それにヨーロッパにまで広がった。貿易商品の種類と量もまた相当に増大した。

岩生成一氏の指摘するところでは、16、17世紀に日本の貿易が発展した要因に次の3点があった。すなわち、第1に中国大陸との交渉が中断していたこと、第2に世界的趨勢として国

際貿易が増大していたこと、そして第3に日本の国内情勢が安定し産業がよく発達したこと、の3点である。これに先行する時代は、⁷⁾15世紀半ば以来約1世紀間にわたって戦国時代が続いていた。国内の戦乱に対応するかのように倭寇が中国の中部および南部の海岸地方に出没するようになると、明朝は日本船を締め出し、日本との国交を停止してしまった。こうした状況のもとで、日本の商人たちは絹、生糸といった中国産の商品を中国以外の地において求める必要が生じた。

すでに述べたように、これらの中国産商品は琉球商人が供給していたが、日本における中国および他の外国産商品に対する要求は琉球商人の供給する範囲を越えて増大した。なによりも日本の商人たち自らが貿易を行ないたいと思うようになった。かくして日本船が台湾、フィリピン、ベトナム、チャンパ、カンボディア、タイ、マレーシア、インドネシアの諸港を訪れるようになった。これらの港で日本の商人はその地に運び込まれた中国産生糸や絹を購入するのみならず、ベトナムやベンガル地方、ペルシアなどで産した絹や、インド製の綿製品その他の品を入手したのである。

16世紀半ばになって東南アジア海域におけるポルトガルおよびスペインの貿易、航海活動が活況を呈するようになったことも、日本人の海外活動を促す刺激作用を果した。このころまでに戦国時代は終息し、国内統一へ向けての新たな動きが日本で起こりはじめていた。1590年、豊臣秀吉が全国統一に成功するが、1600年の関ヶ原の戦いを経て政治権力は徳川家康の手に移る。そして3年後、家康は征夷大將軍となり江戸に幕府を開設した。秀吉、家康の時代はムガル朝インドのアクバル時代に対応するが、この時代に日本でも次第に社会秩序が確立されていった。それとともに、日常必需品と並んで舶来品に対する需要も増大した。商業の発達や都市の成長に伴って富裕な商人階級が登場し、彼らの中にはその資金を有望な海外貿易に投資するものが現れた。

秀吉は儲けの大きい海外貿易業者を自己の統制下に置こうとしたが、この考え方を継承した家康は1601年朱印船の制度を出発させた。これ以降、幕府から特別の許可証である朱印状を受けた者だけが朱印船による海外貿易に従事することができた。朱印状は一航海についてのみ有効であったので、航海を行うごとにこの許可証を入手する必要があった。この制度によって、徳川幕府は日本の貿易業者を容易に統制することが可能となった。

朱印船が寄る港は広範にわたっていたが、最もよく訪れたところはトンキン、コーチシナ、カンボディア、タイ、フィリピン、台湾の諸港であった。1604年から1635年の間に、350隻の朱印船がこれらの港に向けて航海した。船の規模も、この時期になるとかなり大きなものとなっていた。1623年コーチシナに向けて航海した朱印船は積載容量300トン、乗組員300人であった。1626年タイに向けて航海した別の朱印船は積載容量800トン、乗組員397人であった。東南アジアへの航海は通常晩秋から初冬のころ、銀・銅・銅銭・硫黄・樟脳・米・雑

貨等を積んで出発し、翌年の春から夏のころ、生糸・絹織物・綿織物・獣皮・鮫皮・蘇木・鉛・錫・砂糖その他を積んで帰着した。⁸⁾

ポルトガルとスペインに続いて、オランダとイギリスも東方進出に乗り出した。1609年オランダ東インド会社の船が九州北西部の平戸に現われ、商館開設の許可を受けた。4年後、イギリス東インド会社も平戸に商館開設の許可をえた。オランダ、イギリスの来航と時を同じくして、多くの中国船も1610年以降九州各港を再訪するようになった。このように16世紀の半ばから17世紀の前半にかけて、日本の商人たちは豊臣、徳川両政権の奨励を受けて海外貿易に積極的に取り組むようになり、西欧商船の日本来港もまたしきりに見られるようになった。東南アジア各地には、日本人の入植地が形成されるようになった。

2 東南アジア諸港のグジャラート商人

グジャラート地方はスーラト、キャンベイ、ゴーガ、ディウといった主要港を擁しており、ムガル帝国下の最も重要な商業地域であった。ムガル朝の成立以前においても、グジャラート地方はインド洋に面した大交易センターの一つであった。パーブルがインドに新しい王朝を創設する前夜のころ、先述のトメ・ピレスはインド洋上におけるグジャラート商人の活発な商業活動について、「カンバヤ〔キャンベイ〕は2本の腕をのばし、右手でアデンを握り、もう一方の手でマラカ〔マラッカ〕を握っている」と述べていた。⁹⁾ これまでにグジャラート商人のさまざまな側面について、多くの研究成果が発表されてきた。¹⁰⁾ しかしながら、彼らがインドの東方つまり東南アジア海域で行った活動については、必ずしも十分な注意が払われてきたとはいえない。

東南アジアの多島海は、インド洋と東・南シナ海との上を吹く相異った方向の風がぶつかり合うところに位置している。ここを航行するすべての船は、風向きが航海に好ましい方向に変わるまでここに滞留することを余儀なくされたので、自然とここにアジア各地域から訪れてくる商人たちのための常設の市場が発達することとなった。¹¹⁾ インドのコロマンデル海岸、ベンガル、グジャラートの各地方を発った船は、しばしばこの東南アジアの諸港を訪れ、アジアの他地方からやってくる船とここで商品の交換を行ったのである。マラッカは最も重要な港であり、とりわけグジャラート商人がここには多く来ていた。トメ・ピレスは、グジャラート商人のマラッカでの活動ぶりについて、次のように述べている。¹²⁾

カンバヤの商人は、他のどの地域よりもしっかりとした根拠地をマラッカに置いている。昔はマラッカには千人ものグザラテ〔グジャラート〕人の商人がおり、その他に、常に往来しているグザラテ人の水夫が4,5千人もいた。マラッカはカンバヤなくしては生きてゆかれ

ず、カンバヤもマラカなくしては豊かに繁栄することはできない。グザラテのすべての衣服と品物とは、マラカおよびそれと取引している諸王国では高価である。¹³⁾

マラッカが東南アジアの中心的港市となる以前、グジャラート商人は交易のためにジャワに訪れていた。この点についても、トメ・ピレスは次のように述べている。

かれら〔グザラテ人〕は、マラカ海峡が発見される以前は、ジャオア〔ジャワ〕と取引していた。〔かれらは〕サモトラ〔スマトラ〕島の南岸を通り、スンダとソモトラ〔サモトラに同じ〕島の端の間を通してアグラシ〔グリシ〕に航海し、マルコ〔モルッカ〕、ティモルおよびバンダンの品物を入手し、たいへん豊かになって帰国していた。かれらがこの航海を放棄してからまだ百年は経っていない。¹⁴⁾

しかしマラッカがポルトガル人によって1511年に占領されると、グジャラート商人たちのこの港市に対する影響力は後退せざるをえなかった。再びトメ・ピレスの言葉を引こう。

マラカが陛下のものになったことは、グザラテ人にとってたいへんな重荷となっている。そしてかれらがディオゴ・ロペス・デ・セケイラに対して行われた裏切りを命じた人々である。今日ではマラカにある市場で、グザラテ人の助言によってマラヨ〔マライ〕人が行ったこと〔をうたった歌〕がうたわれている。¹⁵⁾

グジャラート人たちはマラッカを撤退したのち、彼らの通商基地をスマトラ島北端のアチン（アチー）に移した。彼らはスマトラ島西岸に位置するミナングカバウ地方のプリアマン、ティク、バロス等の諸港にもしばしば訪れた。トメ・ピレスよりおよそ100年後にアチンその他の港を訪れたイギリス人たちは、これらの港になおグジャラート商人と彼らの商船を見出した。例えば、1602年にジェームズ・ランカスター卿がアチンを訪れた際、そこにはグジャラート人を含むさまざまな国からやってきた16ないし18隻の商船が停泊していた。¹⁶⁾ また1605年にヘンリー・ミドルトン卿がモルッカ島のテルナテを訪れた時、グジャラート商人がそこに搬入されてくるあらゆる種類の商品の価格の取り決めを、オランダ人との間で行なっているのを目撃した。¹⁷⁾ さらに1613年にアチンを訪れたトマス・ベストは、グジャラート商人たちがアチンでのみ貿易することを認められており、当時アチンの王の支配下におかれて間もないティクやプリアマン等の港で貿易することは彼らに認められていなかったことを明らかにしたのち、彼らのアチンでの貿易について次のように述べている。

我々がスーラトで購入した商品は、総じて当地では不向きである。ブローチ産の1反当りの重さ30ないし70マースの白地の上質キャラコか、12ないし30マースの青地の上質のもの以外は、当地では売れない。グジャラート人たちにはアチン以外の土地で貿易することが王によってすべて禁止されているので、今や当地には商品があふれている。グジャラート人の商船が4隻こちらに來航しているということであるが、我々が實際目にしたのは2隻¹⁸⁾だった。

イギリス東インド会社の商人たちが貿易のためアチンに來訪するようになると、彼らの商取引の相手は通例グジャラート商人であった。グジャラート商人たちはアチンの王の支配のもとでこの地に居留し、極めて裕富な生活を送り、また彼らの権利も相応に認められていた。¹⁹⁾イギリス人たちは、アチンのグジャラート商人が彼らにとって貿易上の手ごわいライバルであることを認めざるをえなかった。この点について、「グジャラート人たちは商売上、我々の強力な敵対者であり、とりわけ彼らにとって儲けの多いアチンに我々が居留することに対して強く反対していた²⁰⁾」というように、イギリス人は述べていた。しかしながらグジャラート商人たちは、イギリスおよびオランダの影響力がアチンで強まっていくに従って、この地における有利な地位から次第に追い立てられていくことを避けることができなかった。その上、ポルトガルがインド洋航行のグジャラート商人に通行許可証の取得を強制して妨害したことも、彼らにとっては大きな痛手であった。

こうした困難な事態に直面したにもかかわらず、グジャラート商人は依然として東南アジア諸港市との交易を続けていた。そのことは、アフマダバード、キャンベイ、バローダ、およびブローチのオランダ商館を取り仕切っていたヨハン・ファン・トウィストの記述によっても確認される。彼には、1638年ないしそれより少し前に書かれた著作『インド概観』(A General Description of India)があるが、その中でグジャラートのムスリムたちの海外貿易について次のように述べている。

積載容量100トンないし300トンの船何隻かが毎年アヘン、綿布その他さまざまなグジャラート産の衣料を積んで、アチンとケダーに向けて航海する。これらの船は硫黄、安息香、樟腦、磁器、錫の他に、できるだけ多くの胡椒その他の香料を積んで帰ってくる。これらの船は5月に出港する。なぜならば、ポルトガルが胡椒ないし香料を舶載して持ち帰ろうとする者に、殺害ないし商品没収の脅迫をかけて通航許可証を強要しており、この難題を避けるために、これらのムスリムたちの商船はポルトガルの艦隊が……冬港に繋船するまで待機するからである。そして彼らは、ポルトガル艦隊が再び海上に登場する以前の10月初めに、次の航海を敢行する。²¹⁾

ヨハン・ファン・トウィストと同時代のホルスタイン公国出身のマンデルスロがインドを訪れたのは、1638年から1640年のころであった。その旅行記の中で彼は、「彼ら〔グジャラート人〕が行なう最大の航海は、東方ではジャワおよびスマトラへの航海であり、紅海方面ではアデンおよびメッカ向けの航海である」というように述べていた。²²⁾ 彼もまた、グジャラート商人が東南アジアに輸出する商品やそこから輸入する品物、それに彼らがポルトガルの海上監視を回避する方法についても述べているが、その内容はトウィストとほとんど変るところがない。彼らが東南アジアからグジャラートに搬入した品物の中には、日本から東南アジア向けに輸出されたものが含まれていた。

3 ムガル朝時代のインドと日本

ポルトガルはゴアおよびマラッカを占領して間もなく、活動舞台を東アジアにまで広げ、中国のマカオをその拠点とした。彼らの船の1隻が1543年に九州の南方、種子島に漂着した。それから5年後、3人の日本人のキリスト教徒がポルトガル船でゴアを訪問した。海路による日本人の最初のインド訪問であった。その翌年、彼らは有名なイエズス会士フランシスコ・ザヴィエルを伴って帰国した。ポルトガル船はこのころ以後、西日本の港に寄港するようになり、1570年の長崎開港以後こことマカオを結びながら、日本をめぐるヨーロッパ人の初期の商業活動において中心的な役割を果たすようになった。

日本のイエズス会が1574年から1585年の間にインドのバセイン近くの3カ村を購入し、そこからあがる税収を日本における宣教活動の費用に充てるものとしていたことは、極めて興味深い。²³⁾ しかしながら1587年、秀吉はキリスト教布教活動の禁止令と宣教師の追放令を出し、彼の意図する全国統一にとって望しくない要素を除去しようとした。この翌年から豊臣政権は長崎港を管轄下におさめ、ポルトガル人の活動を監視するとともに、貿易による利益の確保を図った。

この当時ポルトガルが日本を相手に行っていた貿易の主要な特徴は、日本から銀を輸出し、その代替として中国産の生糸と絹を日本に輸入することであった。日本の銀産出量は16世紀後半に増大に向い、17世紀に入るとさらに飛躍的増大に転じて、日本を世界第2位の銀産出国に押し上げた。²⁴⁾ ポルトガルよりおくれて日本にやっときたオランダとイギリスも、同様に日本から銀を輸出し、絹を日本に輸入するという形の貿易を当初は行っていたが、同時にインド産の綿製品等も日本に持ち込んでいた。日本のイギリス商館の初代館長となったリチャード・コックスの日記には、グジャラート綿布、アフマダバード綿布、カンバヤ綿布、バフタ織、チンツ織などといったさまざまなインド産綿布の記述が見られる。1615年10月18日の日記で、「カンバヤ綿布」のすべての梱包を解いてみたところ、ほとんどのバフタ織に染みが付い

ているかあるいは腐食していた、と書いていた。²⁵⁾ また 1617 年 10 月 6 日に、彼は平戸に搬入されたすべての「海岸産綿布」つまりコロマンデル海岸産綿布と「カンバヤ綿布」を江戸に送り届けるよう指示した。²⁶⁾ さらに R・ウィッカムは、「ミヤコ」つまり京都からコックスに宛てた 1615 年 9 月 28 日付の手紙で、そこではインド産の織布がよく売れると知らせていた。²⁷⁾

イギリス東インド会社によって輸出された日本産の銀のうち、多くはインドにもたらされた。例えば 1623 年、3 万リアル²⁸⁾の日本産銀が他の商品とともにバタヴィアからマスリパタムに輸入された。日本産の樟脳や焼物も輸出され、日本産の銅はスーラトとマスリパタムで大量に売られるようになった。²⁹⁾ 平戸のイギリス商館は 1623 年末に閉鎖されたけれども、イギリスは東南アジアのバンタムその他の港で他国船から積み替して、日本産銀はじめこれらの商品を引き続きインド市場に輸出していた。

イギリスが日本から撤退したのは、オランダ船がしばしば日本産の商品をインドに輸出し、またインド産の商品を日本に輸入するようになった。イギリス側の資料によると、例えば 1639 年、2 隻のオランダ船が 200 梱の銀をスーラトに輸出し、³⁰⁾ また 1641 年には 3 隻のオランダ船が多量の銀をはじめ、金その他の商品を含む総額 50 万ルピーの商品をスーラトに輸出し、³¹⁾ さらに 1643 年には 2 隻のオランダ船がスーラト近くのスワリーに到着し、多量の亜鉛とともに 103 梱の日本産銀を陸揚げした。³²⁾ オランダはまた需要の多いインドに、毎年大量の日本産の銅を輸出していた。³³⁾ ここで、フランス人のインド旅行家フランソワ・ベルニエの次のことが想起される。

日本には金銀の鉱山がありますが、この日本からオランダ人が持ち出す多量の金銀も、その一部は、遅かれ早かれこのヒンドゥスターンに流れ込みます。…もちろんヒンドゥスターンも、銅やクロブ、ナツメグ、シナモン、象、およびオランダ人によって日本やモルッカ諸島やセイロンやヨーロッパから運ばれる、幾つかの品々を必要としていると言えます。³⁴⁾

一方、インドから日本に向けて、オランダはグジャラート産やコロマンデル産の綿布、ベンガル産の絹などを持ち込んだ。フーグリーのイギリス商館員がスーラトに送った 1664 年 10 月 4 日付の書簡では、次のように述べられている。

日本などが彼ら〔オランダ人〕との貿易および彼らがこの地域〔ベンガル地方〕から持ち出す品物に依存している限り、彼らは少々のことであってもこの地域から引き上げることはないものと考えます。³⁵⁾

オランダ船と並んで、中国船も日本産の銀、銅、その他の品を持ち出し、そのうちのある部分は東南アジアの諸港に運び込まれたが、それらはそこで再び積み替えられてインド市場に搬入されるものも少なくなかったはずである。

徳川幕府は大きな利益をもたらす海外貿易に強い関心をもっていたが、キリスト教徒の活動が幕府の支配と全国統一に障害をもたらはしないかという点についても無関心ではいられなかった。彼らは、海外貿易の統制およびキリスト教布教活動の禁止という秀吉のとった政策を、さらに強化していった。そして1635年、徳川幕府は外国船の寄港を長崎港1港に限定し、日本人の海外渡航を禁止した。この禁令によって、活気に満ちていた日本の海外貿易商人と船乗りたちの活動はすべて終息することを余儀なくされた。翌年ポルトガル商人は長崎港の人工島、出島に移され、さらに3年後の1639年7月、すべてのポルトガル人は日本から追放された。これに先立つ前年の5月、江戸参府していた平戸のオランダ商館長の一行は、秘かに幕府要人から、近くポルトガルを日本から追放する予定である旨事前に知らされていた。幕府要人がとりわけ心配していたことは、ポルトガルを日本から追放した場合、これまで彼らが日本にもたらしていた商品をオランダ人が果して確実にもたらしてくれるかどうか、という点であった。この点に関して、オランダ商館長は保証し、幕府側を安心させた。³⁶⁾この事実は、幕府が鎖国政策をとったにもかかわらず、海外貿易の継続を確保することにいかに大きな関心をもっていたかをよく示している。

1641年4月、徳川幕府は平戸のオランダ商館を長崎の出島に移転させた。この年、東南アジアにおけるポルトガルの最大拠点であったマラッカがオランダとアチンの連合艦隊によって占領され、ゴアとマカオを結ぶポルトガルの海上ルートは切断された。日本の鎖国政策は、これによって完了されたといえる。日本の鎖国化は、同時にまたヨーロッパ諸国のなかでただオランダ1国のみが日本と通商する特権を確立していく過程でもあった。とはいえその通商は、長崎港1港に限定され、厳しい監視におかれたものであった。オランダは、東アジアおよび東南アジアの海上において日本人が確立していた朱印船による貿易網を引き継いだ、といって間違いはないであろう。それはあたかも、それ以前の段階においてポルトガルが既存のムスリム商人たちの貿易網、とりわけグジャラート商人がインド洋において確立していた貿易網を引き継いだのと、まさに軌を一にするものであった。³⁷⁾

すでに述べたように、日本から輸出する主要な品物は銀であり、輸入の主要品は生糸であった。1636年平戸のオランダ商館が扱った全輸出額の85.8パーセントを銀が占め、銅が9.2パーセントを占めていた。一方生糸は、同じ年の全輸入額の59.4パーセントを占め、これに絹織物を加えると80.4パーセントに達した。³⁸⁾オランダ東インド会社のアジア貿易にとって、日本との貿易が卓絶したものとなり、日本からの銀輸出はオランダのアジア貿易の中心を占めていた。オランダ船が日本からバタヴィアに搬出した銀の多くは、そこから再び舶送されて、

インドのコロマンデル海岸地方へ多く輸出された。³⁹⁾

しかしながら 1668 年、徳川幕府は銀輸出の禁令を出した。これ以上銀の輸出を続ければ、国内の経済的混乱をもたらしかねないことを恐れたからである。4 年後、中国船のみが日本からの銀輸出を認められたが、輸出量は以前と比べて極度に制限された。それでも、中国船によって東南アジア市場にもたらされた日本銀の一部は、そこからさらにインドへと舶送された。バンタムのイギリス東インド会社代理人が 1674 年 10 月 5 日付で記した書簡によると、この当時でもなお日本産の金、銀、銅がこの地に搬入され続けていたことがわかる。⁴⁰⁾

銀禁輸令の後にオランダが目付けたのは、金貨の小判であった。日本の金輸出は 1670 年ごろ最盛期を迎えた。インドではコロマンデル海岸地方が、銀の場合と同様、日本産金を最も多く輸入した地域であった。しかしながら日本の金輸出は、その後急速に後退していった。日本で小判の価格が大幅に引き上げられたのみならず、その品質が低下したからである。⁴¹⁾

銅もまた重要な日本からの輸出品であった。一方、17 世紀のインドでは銅の需要が高まった。銅銭や武器をはじめ、建築、装飾、造船等の用途が拡大したからである。北インドで銅生産が減少していくのに対して、日本では 17 世紀を通して輸出用の銅生産が増大していった。オランダは 1620 年代以降、日本産の銅輸出を行っていたが、幕府が銀の禁輸令を出し、また 1670 年代に金輸出も後退するようになると、とりわけこの銅輸出に力を入れるようになった。1698 年、オランダが日本から輸出する銅の量は、最大値の 348 万蘭ポンドに達した。そのうち僅か 14 パーセントがヨーロッパ市場に持ち帰られただけで、残りはアジア市場、なかんずくインドに持ち込まれた。この当時、日本国内で消費される銅の量は約 60 万蘭ポンドと推定されたが、これは輸出される銅と比較すると、およそその 6 分の 1 強に相当するに過ぎなかった。オランダ東インド会社が 1645 年から 1684 年の間にスーラトに搬入した日本産銅の総量は 1429 万余蘭ポンド、1701 年から 1724 年の間のスーラト搬入総量は 696 万余蘭ポンドと計算されているが、もちろんインドの他の地域でも大量の日本銅が陸揚げされた。スーラト・ベンガル・コロマンデル・マラバール・セイロンのオランダ商館で毎年陸揚げされる日本産銅は総計すると、オランダ船によって長崎から搬出される輸出銅のほぼ 4 分の 3 ないしそれ以上に相当する。インドでの銅の価格は、日本で買付けるときの原価と比べて 2 倍、あるいはそれ以上であるのが通例であった。かくしてムガル帝国時代、インド市場は極めて多量の日本産銅を輸入し、オランダ東インド会社はこの日本産銅の取引によって巨利を博したのであった。⁴²⁾
⁴³⁾

日本とインド間のこの儲けの大きい貿易に参入したいと、イギリスはかねて狙っており、実際 1674 年には、日本との直接取引の道を開くために禁令を犯して「リターン」号を日本に送って寄港させようとする挙に出た。しかしながら、イギリスは幕府から日本との貿易の許可をえることはできなかった。⁴⁴⁾イギリスの日本貿易再開の熱意は強いものがあつたらしく、この

事件があった後になってもなお、マドラスのイギリス東インド会社商館員は1689年9月11日付の信書のなかで、日本との貿易再開に向けてさらに努力するよう勧めていた。⁴⁵⁾

長崎に入港するオランダ船の隻数は、年によって一定していなかった。1660年代には毎年10隻あるいはそれ以上が来港していたが、18世紀に入ると年間4、5隻となり、1716年以降は年間2隻、そして1790年から後は年間1隻に減少してしまう。⁴⁶⁾

1641年以降、オランダ商館長は毎年江戸に参府して、世界各地の情勢を記した風説書を幕府に提出するよう求められた。この風説書はオランダ語で書かれ、通詞たちによって直ちに翻訳されたものであって、その内容は長崎に至る各寄港地で耳にした風聞の域を出ぬものが少なくないが、なかには同時代の世界情勢をかなり正確に伝えているものがある。例えば天和元年(1681)の風説書は、同年1月ムガル帝国内で発生したアウラングゼーブ帝に対する皇子アクバルの謀反について、次のように述べている。「辨柄国、サタラ国、コスト・コロモンデイル国、此三カ国を取居申候守護〔アウラングゼーブ帝—引用者〕、世倅に国を譲り候事及延引候故、世倅方より親を国を取申候手立ニ而、親子軍最中仕申候御事」。⁴⁷⁾ また宝永5年(1708)の風説書には、前年のアウラングゼーブ帝の死去に伴う皇子たちの間の皇位継承戦争について、次のように記している。「モウル国之惣国主モゴルと申者、年百歳罷成申候、去年病死仕候、彼者男子四人御座候、此四人之子供国を諍ひ軍仕候処、右四人之内、次男壹人は討死仕、其上騎馬壹萬五千騎、雑兵拾式萬、象百疋餘打殺、軍相止申候、然る処、今又相残三人之面々、大勢を催、軍之用意仕候由、サラタ国より咬嚙吧〔ジャガタラ〕え申越候」。⁴⁸⁾ 風説書によるこのような情報の提供は、同時代の世界の動きを日本に伝える上で、重要な役割を担うものであった。とはいえ、その情報の伝わる範囲は、当時の支配層のごく一部に限られていた。

K・N・チョウドゥリ氏は、インド洋沿岸一帯がイギリスやオランダの到来以前において、季節風の周期的循環と沿岸各地の経済的相互依存によって構造的な一体性をもつものであったことを指摘していた。⁴⁹⁾ 氏はまたその後公にした大著でも、次のように述べている。「インド洋」は、外延的には、西はスエズ湾から東は日本近海にまで広がり、ここにはイスラム文明・インド文明・東南アジア文明・中国文明の四大文明が栄えていたが、遠距離貿易および大都市市場が存在したために、さまざまな形の一体性が作り出されていた、と。⁵⁰⁾ 思うに、ヨーロッパ海上勢力がインド洋に登場するようになった結果もたらされた大きな変化の一つは、チョウドゥリ氏のいう構造的な一体性がインド洋沿岸諸国を越えて拡大されたことであった。沿岸諸国と遠距離諸国との経済的相互依存関係が増大したのである。

日本人の海上活動は16世紀および17世紀初頭において活況を呈しており、日本の商人たちは東南アジア海域においてグジャラート商人や他地方出身のインド商人と直接的、あるいは間接的な商取引を行なうようになっていた。しかしこうした日本人の海上活動は、いわゆる大航海時代以降のヨーロッパ人の海上活動と比べてみると、その期間が著しく短かった。徳川幕

府がその政策を変更して、日本人の海上活動を禁圧してしまったからである。しかも幕府は海外貿易を制限し、貿易港を長崎に限定してオランダ船と中国船の来港しか認めなかった。しかしながら、これまで述べてきたように、こうして制限された条件下においても、江戸時代の日本とムガル帝国下のインドとの間には、オランダ東インド会社の取引を通して、かなり密接な経済関係のあったことも事実であった。イギリス東インド会社も、一時は仲介的な役割を果たしたことがあった。鎖国時代の日本は、今日我々が考える以上に、インドや他のインド洋沿岸諸国をはじめとする海外世界と深い関係をもっていたのである。

お わ り に

朝尾直弘氏の『鎖国』によると、徳川幕府は鎖国令の実施と同時に、京都・堺・長崎・江戸・大坂の5都市の商人たちに、長崎で輸入した生糸の購入と国内販売の独占権を認めた。糸割符と呼ばれる制度である。この糸割符制は幕府管理下の貿易として鎖国と不可分の関係にあり、鎖国を裏面から支える役割を果たした、とされる。⁵¹⁾この朝尾氏の研究から大きな刺激を受けたというロナルド・トビ氏も、日本は鎖国令実施以後も全徳川時代を通して海外、とりわけ東アジア地域世界と深い関係をもっていたことを指摘している。⁵²⁾また加藤栄一氏も、新著において鎖国成立期の研究史を整理し、そのなかで日本の鎖国制がいわゆる大航海時代の開幕によって全世界に波及した社会変動、とりわけ東アジアにおける国際情勢の変動に対応する政策として実現されたものであったことを強調している。⁵³⁾

一方川勝平太氏は、日本の「鎖国」をヨーロッパの「近代世界システム」と対応するアジア物産の自家葉籠品化の過程、すなわち「脱亜」の過程としてとらえる見方を提案している。⁵⁴⁾松井透氏の『世界市場の形成』は、こうした近代世界システム論を南アジアに視点をすえて検討し、近世以来のインドの貿易問題を世界市場との関係において論じたものであった。⁵⁵⁾

ムガル帝国期のインド洋と日本との関係を考える際、上に紹介したような見方や研究成果は今後大いに参考になるであろう。広く近世における日本・インド関係、ないし近世日本の同時代インド認識にかかわる研究としては、長島弘氏の興味深い論文があり、⁵⁶⁾また江戸時代のインド物産、とりわけ絹織の輸入に見られる天竺文化の受容について、重松伸司氏のこれまた興味深い著書が公にされた。⁵⁷⁾さらに、京都の祇園祭の山鉾の装飾に使われる胴掛等の懸装品には、ムガル朝時代のインドで生産された絨毯、刺繍掛物、更紗掛物、更紗反物等が数多く用いられていることも、最近明らかにされた。⁵⁸⁾こうして、近世における日本とインドの交流の隠されていた側面に、さまざまな角度から新たな光が投げかけられており、興味と関心の輪がさらに広がっていかうとしている。

注

- 1) 田中重久『日本に遺る印度系文物の研究』東京堂, 1943年, 487-491頁。なお高丘親王の天竺渡海を素材にした小説に, 澁澤龍彦『高丘親王航海記』文芸春秋社, 1987年がある。
- 2) 奥田勲『明恵——遍歴と夢』東京大学出版会, 1978年, 4-6頁。京都国立博物館編『明恵上人没後750年高山寺展』朝日新聞社, 1981年, 6-13頁他。
- 3) 中村元『日本におけるインド文化の発見』(日本文化研究1)新潮社, 1958年, 52-60頁参照。
- 4) 宮崎市定『日出づる国と日暮るる処』星野書店, 1943年, 『宮崎市定全集』第22巻所収, 岩波書店, 1992年, 27-56頁。田中健夫『倭寇と勘合貿易』至文堂, 1966年, 193-197, 209-214頁。
- 5) 小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』日本評論社, 1939年, 523-537頁。
- 6) トメ・ピレス(生田滋他訳)『東方諸国記』(大航海時代叢書5)岩波書店, 1966年, 249, 251頁。
The Suma Oriental of Tomé Pires and the Book of Francisco Rodrigues, English translation and edition by Armando Cortesão, London, 1944, pp.130, 131. 引用文末尾の「衣服」は英語版によって補充した。
- 7) Seichi Iwao, 'Japanese Foreign Trade in the 16th and 17th Centuries,' *Acta Asiatica*, No. 30, 1976, pp. 1-18.
- 8) 岩生成一『朱印船と日本町』至文堂, 1966年, 35-43, 66-68頁。
- 9) 『東方諸国記』114頁。*Suma Oriental*, p.42.
- 10) 注目される研究としては次のようなものがある。Surendra Gopal, *Commerce and Crafts in Gujarat, 16th and 17th Centuries, A study in the impact of European expansion on pre-colonial economy*, New Delhi, 1975; M. N. Pearson, *Merchants and Rulers in Gujarat, The response to the Portuguese in the sixteenth century*, Berkeley—Los Angeles—London, 1976. 生田滋訳『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』岩波書店, 1984年。O. P. Singh, *Surat and its Trade in the Second Half of the 17th Century*, Delhi, 1977; Ann Bos Radwan, *The Dutch in Western India 1601-1632, A study of mutual accommodation*, Calcutta, 1978; B. G. Gokhale, *Surat in the Seventeenth Century, A study in urban history of pre-modern India*, Bombay, 1979; Ashin Das Gupta, *Indian Merchant and the Decline of Surat, c. 1700-1750*, Wiesbaden, 1979; K. S. Mathew, *Studies in Trade and Urbanization in Western India*, Baroda, 1984; Lotika Varadarajan, 'Foreign Trade of Surat (1650-1700),' in P. M. Joshi and M. A. Nayeem (eds.), *Studies in the Foreign Relations of India, Prof. H. K. Sherwani Felicitation Volume*, Hyderabad, 1975, pp. 473-484. 近藤治「ムガル朝インドの商品流通」『中世史講座』第3巻, 学生社, 1982年, 292-319頁。Osamu Kondo, 'Commerce and Industry in Mughal India, with Special Reference to Gujarat,' *Acta Asiatica*, No. 48, 1985, pp. 72-96.
- 11) M. A. P. Melink-Roelofs, 'Trade and Islam in the Malay-Indonesian Archipelago prior to the Arrival of the Europeans,' in D. S. Richards (ed.), *Islam and the Trade of Asia*, Oxford, 1970, p. 138. 近代以前のインド-東南アジア交易圏については, 重松伸司「ベンガル湾という世界——14-16世紀の地域交易圏」『アジアから考える』第2巻, 東京大学出版会, 1993年, 特に57-58頁参照。
- 12) 中継貿易港としてのマラッカの繁栄ぶりについては, 和田久徳「東南アジアの都市と商業——マラッカ国の場合」『中世史講座』第3巻, 学生社, 1982年, 265-291頁参照。
- 13) 『東方諸国記』116-117頁。*Suma Oriental*, p. 45.
- 14) 『東方諸国記』117頁。*Suma Oriental*, pp. 45-46.

- 15) 『東方諸国記』118頁。Suma Oriental, p.47. 英語版によれば、ここの文意は、「マライ人たちがグジャラート人たちの助言通りに〔反ポルトガルの〕行動をとったために町はその報いを受けることになった、と今では市場で囁い語りされている」の意である。
- 16) William Foster (ed.), *The Voyage of Sir James Lancaster in Brazil and the East Indies 1591-1603*, London, 1940, p.90.
- 17) William Foster (ed.), *The Voyage of Sir Henry Middleton to the Moluccas 1604-1606*, London, 1943, pp.31-32.
- 18) William Foster (ed.), *The Voyage of Thomas Best to the East Indies 1612-14*, London, 1934, p.256.
- 19) *Letters Received by the East India Company from the Servants in the East*, Vol. I: 1602-1613, ed. by F. C. Danvers, London, 1896, p.254; Vol. III: 1615, ed. by W. Foster, 1899, pp.226-228.
- 20) *Ibid.*, Vol. III, p.228.
- 21) W. H. Moreland, 'Johan van Twist's Description of India,' *Journal of Indian History*, Vol. XVI, 1937, p.75.
- 22) *The Voyages and Travels of J. Albert de Mandelslo into the East-Indies*, English tr. by John Davies, London, 1662, p.87.
- 23) 高瀬弘一郎「キリシタン時代、インドにおける日本イエズス会の資産について」(上・下)『史学』第46巻第1・2号, 1974年。
- 24) Atsushi Kobata (小葉田淳), 'The Production and Uses of Gold and Silver in 16th and 17th Century Japan,' *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. XVIII, No. 2, 1965, p.248によれば、17世紀初頭における日本の銀輸出は、毎年おおよそ200トンに上ったと推定されている。この点については、私の本稿をかなり詳しく論じながら行なった書評の中で、O・ブラカーシュは他の研究を援用して、日本の銀輸出額がこれよりもずっと控え目であったことを指摘している。Om Prakash, Book Review on *The Indian Ocean, Explonations in history, commerce and politics*, ed. by Satish Chandra, *The Indian Economic and Social History Review*, Vol. XXVI, No. 1, 1989, pp.113-114.
- 25) *Diary Kept by the Head of the English Factory in Japan: Diary of Richard Cocks, 1615-1622*, ed. by the Historiographical Institute, the University of Tokyo, 3 vols., Tokyo, 1978-1980, Vol. I, p.112.
- 26) *Ibid.*, Vol. II, p.181.
- 27) India Office Library and Records, *Factory Records, China and Japan*, G/12/15, p.17, Letter No. XXIII.
- 28) William Foster (ed.), *The English Factories in India*, 13 vols., Oxford, 1906-1927, 1622/1623, p.221.
- 29) *Ibid.*, 1622/1623, p.248; 1624/1629, pp.26, 181.
- 30) *Ibid.*, 1637/1641, pp.215-216.
- 31) *Ibid.*, 1637/1641, p.299.
- 32) *Ibid.*, 1642/1645, p.100.
- 33) *Ibid.*, 1661/1664, p.110.
- 34) François Bernier, *Voyage dans les états du Grand Mogol*, Paris, 1981, p.146; Irving Brock (tr.), *Travels in the Mogul Empire, AD 1656-1668*, ed. by A. Constable, London, 1891,

- reprint, New Delhi, 1968, p. 203. ベルニエ（関美奈子・倉田信子訳）『ムガル帝国誌』（17・18世紀大旅行記叢書5）岩波書店，1993年，165頁。
- 35) *English Factories in India*, 1661 / 1664, p. 400.
- 36) *Diaries Kept by the Heads of the Dutch Factory in Japan*, ed. by the Historiographical Institute, the University of Tokyo, Vol. III : Dagregister gehouden door Nicolaes Couckebacker, August 9, 1637—February 3, 1639, Tokyo, 1977, pp. 149—154. 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』譯文編之三（上），東京大学史料編纂所，1977年，199—205頁。
- 37) Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System I, Capitalist agriculture and the origins of the European World-Economy in the sixteenth century*, New York, 1974, p. 328. 川北稔訳『近代世界システム』II，岩波書店，1981年，240—241頁参照。
- 38) 加藤栄一「平戸オランダ商館の商業帳簿に見られる日蘭貿易の一断面——1636年のオランダ商館「仕訳帳」の分析を中心に」『東京大学史料編纂所報』第3号，1968年，23—63頁。同「1636年度平戸オランダ商館の輸出入商品」『東京大学史料編纂所報』第4号，1969年，57—75頁。および同氏の次の英文論文参照。Eiichi Kato, 'The Japanese-Dutch Trade in the Formative Period of the Seclusion Policy, Particularly on the Raw Silk Trade by the Dutch Factory at Hirado 1620—1640,' *Acta Asiatica*, No. 30, 1976, pp. 34—84.
- 39) Kristof Glamann, *Dutch-Asiatic Trade, 1620-1740*, Copenhagen-The Hague, 1958, pp. 57—59.
- 40) India Office Library and Records, *Factory Records, China and Japan*, G/ 12 / 13, Japan, p. 292.
- 41) Glamann, *op. cit.*, pp. 63—68; Tapan Raychaudhuri, *Jan Company in Coromandel 1605-1690, A study in the interrelations of European commerce and traditional economies*, The Hague, 1962, p. 191.
- 42) 鈴木康子「18世紀初頭のオランダによる日本輸出商品の販路」『史学雑誌』第99編第12号，1990年，43—72頁によると，セイロン・コロマンデル・マラバル・ベンガル・スーラト・ベルシア・モカの西南アジア諸地域において，1701年から1724年の間に販売された日本銅の総量は2904万8245両ポンドであって，販売地毎の内訳はベンガル27パーセント，コロマンデル24.6パーセント，スーラト24パーセント，セイロン11.6パーセント，マラバル8.4パーセント，モカ3.5パーセント，ベルシア1パーセント弱であったという。
- 43) Glamann, *op. cit.*, pp. 167—182; Glamann, 'The Dutch East India Company's Trade in Japanese Copper, 1645—1736,' *Scandinavian Economic History Review*, Vol. I, No. 1, 1953, pp. 41—79.
- 44) *Factory Records, China and Japan*, G/ 12 / 13, p. 288.
- 45) *Factory Records, China and Japan*, G/ 12 / 9, p. 667.
- 46) 18世紀に長崎に来港したオランダ船の舶載品を分析した論文に次のものがある。石田千尋「近世日蘭貿易品の基礎的研究——正徳2年（1712）を事例として」『長崎談叢』第69輯，1984年，109—124頁。同「出島貿易品の基礎的研究——享保14年（1729）長崎入港オランダ船の積荷について」『日蘭学会会誌』第10巻第1号，1985年，25—46頁。同「近世中期オランダ船積荷物の基礎的研究——天明元年・3年（1781・1783）を事例として」『青山学院大学文学部紀要』第27号，1985年，185—204頁。石田氏のこれらの研究によると，1712年の舶載品にはスーラト港積載のものがかなり認められるが，1729年および1781・83年の舶載品にはベンガル地方およびコロマン

デル海岸地方の産品が圧倒的に多くなっていることが分る。

- 47) 日蘭学会・法政蘭学研究会編、岩生成一監修『和蘭風説書集成』上・下巻、吉川弘文館、1977、1979年、上巻、107頁。オランダ語原文は下巻324頁。この原文からの和訳文は次のようになっている。「モゴル大王とその第3王子〔実際は第4皇子アクバル〕との間に激しい戦争が勃発し、そのためスラッタ、コロマンデル、ベンガル地方に於て、会社の貿易は相当妨害され、このような理由で、本年当地に持渡ったベンガラ生糸は一時非常に高価にて買入れなければならなくなった」(上巻、109頁)。
- 48) 前掲書、上巻、225頁。
- 49) K. N. Chaudhuri, *Trade and Civilization in the Indian Ocean, An economic history from the rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1985, p. 83.
- 50) K. N. Chaudhuri, *Asia before Europe, Economy and civilization of the Indian Ocean from the rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1990, pp. 30-31, 147.
- 51) 朝尾直弘『鎖国』(日本の歴史17) 小学館、1975年、238-241頁。
- 52) Ronald P. Toby, *State and Diplomacy in Early Modern Japan, Asia in the development of the Tokugawa Bakufu*, Princeton, 1984, p. 22. 速水融・永積洋子・川勝平太訳『近世日本の国家形成と外交』創文社、1990年、30頁。
- 53) 加藤栄一『幕藩制国家の形成と外国貿易』校倉書房、1993年、271-272頁。
- 54) 川勝平太「日本の工業化をめぐる外圧とアジア間競争」浜下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』リプロポート、1991年、157-193頁。同『脱亜』過程としての日・欧の近世』『歴史評論』第515号、1993年、43-58頁。
- 55) 松井透『世界市場の形成』岩波書店、1991年、特に151-180頁参照。
- 56) 長島弘『「訳詞長短話」のモウル語について——近世日本におけるインド認識の一側面』『長崎県立国際経済大学論集』第19巻第4号、1986年、133-168頁。
- 57) 重松伸司『マドラス物語——海道のインド文化誌』中公新書、1993年、特に1-55頁。
- 58) 梶谷宣子・吉田孝次郎『祇園祭山鉦懸装品調査報告書 渡来染織品の部』祇園祭山鉦連合会、1992年、52-69, 123-128, 140頁。

(付記) 本稿は、もと本誌第19号に発表され、後にその改訂稿が Satish Chandra (ed.), *The Indian Ocean, Explorations in history, commerce, and politics*, New Delhi: Sage Publications, 1987に収載された 'Japan and the Indian Ocean at the Time of the Mughal Empire, with Special Reference to Gujarat' の日本語版である。本稿を草するに際し、かなり大幅な補筆を行ない、また注記にも最近の研究成果を取り入れるよう努めた。このため表題も少し変更した。

1994年3月8日 受理